【316】

氏　名（本籍）	末　久　真理子（埼 玉 県）（すえ ひさ まりこ）
学 位 の 種 類	博　　士（芸 術 学）
学 位 記 番 号	博　甲　第　4456　号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	**近世初期における小袖意匠の系譜**

主　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守　屋　正　彦
副　査	筑波大学助教授	Dr. phil	長　田　年　弘
副　査	筑波大学講師	博士（工学）	山　本　早　里
副　査	共立女子大学教授		長　崎　　巌

論 文 の 内 容 の 要 旨

（目的）

近世初期の小袖意匠は，寛文小袖様式に至るまでの成立の問題やその変遷に関して，まだ十分に吟味されたとはいえない状況といえる。また，従来の論考は完全な形で現存されている十数点ほどの小袖の遺品から考察を中心に行なった研究であり，この現状からの論証には限界があると感じられる。しかしながら近世小袖の様式的完成と呼称される寛文小袖様式を起源にもつ，近世初期における小袖意匠の成立過程とその意匠表現の変遷を論じることは，近世の小袖意匠の全体の流れを鑑みるうえで重要であると考えられる。

このような観点から，本研究では近世初期に発生した慶長小袖から寛文小袖に至る間の小袖意匠，すなわち，慶長小袖にみる抽象的で複雑な染め分けの区画をもち，余白の無い地無しの特徴とした構成から，背面に余白を大きく取り動的で大柄な文様を配した寛文小袖に至るまでの全く異なる特徴を持つ近世初期における小袖意匠の成立，発展，定着の過程を，主に意匠形式の変遷という側面から論じるとともに，その意匠形式の発達過程の背景にあるいくつかの要因について解釈を行うことを目的としている。

（対象と方法）

おおよそ慶長期から寛文期頃にかけての遺品を概観してみると，前述した慶長小袖と呼称される小袖遺品群のほかに，それとは異なる様相を示す小袖意匠をいくつか見出だすことが出来る。このような様式分類を曖昧とした状況下にある小袖意匠はどのように捉えていくべきなのであろうか。以上のことを踏まえると，慶長小袖と同時期の遺品とされているが，慶長小袖とは異なる特徴を持つ小袖群が存在している慶長期から寛文期頃の約七十年間は，小袖意匠が近世を通じて最も多彩に変化し，斬新な文様や意匠形式がみられた小袖意匠の重要時期ではないかと推察することができる。

この慶長小袖とは異なる特徴をもつ小袖遺品群を位置づけるために，先行研究で論じられた小袖様式を時系列にまとめ，実物資料の少ない小袖の遺品を補完する意味において，室町時代末期から江戸時代寛永期前後に制作されたと考えられている近世初期風俗画を用いて，小袖遺品との隙を埋める作業を試みた。慶長期から寛文期に至るまでの間の，特に寛永期頃を中心にしてそれらに表現されている小袖意匠について，まず，先行研究史を中心に重要な対象資料である近世初期風俗画の成立背景を概観し，現存資料の脆弱さを補いつ

つ，大系的な考証を行ううえから，そこに描かれた意匠がどのように位置づけられていたかということについて考察し，さらに，武家の服飾との類似性を指摘して，小袖意匠と武家服飾の連繋について論ずる方法を試みた。

（結果）

近世初期の多様な小袖意匠形式とその背景にある文化的，社会的要因との関連を求めて時代背景の中における小袖意匠の位置づけについて論じた。近世という封建的な社会構造のもとで発展してきた集団や，またその様な人々が介在する社会背景の下では，人間と密接な関係にある衣服は自己の存在を示すために非常に有効な役割を担い，特に服制という規範に制約されない新しい小袖形の武家服飾は進取の気風を求めていった。その結果，それぞれの階層における集団を形成する城下町などの中で，各共同体の内外において小袖意匠形式の転用や，融合がなされて，異装を求めた武家の人々を中心にかれらの斬新な服飾が一部当該期の小袖意匠形式を牽引していったと解釈することが出来た。

（考察）

近世初期における小袖意匠形式は次第に町人文化への移行とともに推移し，その結果武家服飾からの影響と，またそれぞれの階層への浸透が具体的な変化の鍵となっていたことが伺える。本研究では複数の小袖意匠形式が相互に影響しあい，それら意匠形式が持つ要素の一部を交換，あるいは転用して成立していることを指摘するとともに，江戸時代における意匠形成のあり方を考察した。

審 査 の 結 果 の 要 旨

末久真理子氏の論文は小袖意匠形式が江戸初期においてどのように変化していったかを解釈したもので，先学によって考察の前提となる慶長小袖形式の研究を指標に得て，それ以後の寛文に至る変化を現存の資料と近世初期の風俗画，さらには武家の服飾の変化を研究の基本資料として取り上げ，その成果を意匠形式の変化として論じたものである。

従来，編年的，横断的に，そして大系的に捉える研究のあり方では，すでに先行研究を拾いながら顕著な時代様式を指摘しつつ位置づける論考が一般的であるが，末久氏の論文は従来の先行研究が直接研究対象としない風俗画や武家の服飾といった領域を吟味の俎上にあげ，研究事例を実存の小袖資料以外に求め，詳細に考察した点が特徴といえる。小袖が近世には庶民へと変化し，普及しており，そのような広がりある意匠化の流れは，前時代の「質」から，より簡易な図案の普及，意匠あり方が想定され，その仮説をもとに基本資料を丹念に比較考察して，意匠形式の編年的な流れ，展開を位置づけようと試みたのである。その微妙な解釈のあり方は風俗画という美術上の表現を記録資料として用い，一方で市場を意識し展開するデザイン的な変化を読み取るもので，特に近世初期風俗画 39 作例から 1,200 余例の小袖意匠を取り上げ，実物資料の脆弱さを補い，かつ複層的な考証を重ねた点は丹念で重要な論考と言えよう。また，武家服飾との比較研究は著者独自のオリジナリティーある視点であり，微妙な小袖の流れを武家服飾と関連付けることで補強し，明快に分類化したものと考える。

慶長期から寛文期に至る小袖意匠形式の考察は，先行研究において，これまで部分的あるいは蓋然的に指摘されてきたが，末久氏の論文によって，はじめて慶長以降の 70 年の流れが概括的に論じられ，大系化できたものと考える。江戸初期における近世小袖意匠研究の端緒を拓く基礎的な研究として高く評価したい。

よって，著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。